慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『万国政表』後の日本における統計学の展開
Sub Title	On some developments in statistics as a Discipline in Japan after the translation of Bankokuseihyo in 1860
Author	宮内, 環(Miyauchi, Tamaki)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2011
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.28, (2011.) ,p.239- 256
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集2 : 事典がひらく新たな世界
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20110000-0239

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『万国政表』後の日本における統計学の展開

宮内　環

経済学部の宮内でございます。最初に『義塾史事典』および『福沢事典』[1]上梓の福沢研究センター・シンポジウムというこのお話をいただき、私にどのくらいのことができるか、いろいろ考えてみました。そこで本日は表題のとおりの報告を申し上げる次第です。

まず、この『義塾史事典』とそれから『福沢事典』を作成されました編集委員、執筆者および写真提供などの協力者の方々には、深く敬意を表したいと思います。たいへん素晴らしい『事典』をつくられたというというのが、手にとって最初の素直な感想でした。私も今回のこの報告のために読ませていただき、もっとゆっくりと拝見する時間があればよかったと改めて思いました。さらに『福沢事典』は、まだ手に取って日が浅いものですけれども、たいへんいろいろな勉強をすることができました。そのことに深く敬意を表したいと思います。

最初に、きょうの報告はその題名「『万国政表』後の日本における統計学の展開」がお示しする通り、『義塾

史事典』および『福沢事典』全体の記述のうち、たいへん限定された内容をその主題としております。と申しますのも、自己紹介を最初にさせていただきますと、実は私はここにお出でになられる多くの先生方のご専門とされる歴史の領域においては、まったくの門外漢であります。自身の専門といたしましては統計学および計量経済学です。私もふだん福沢研究センターに門前の小僧よろしく出入りをさせていただき、勉強をさせていただいているわけですが、私自身の専門領域における関心あるいは観点から、きょうのお話をさせていただきたいと思うのです。その意味でかなりバイアスのかかったお話であろうかと思います。統計学ではバイアスというのは決して良くないのですが、きょうは多少のバイアスをお許しいただければと思います。それではお話を始めたいと思います。

福沢と「スタチスチク」（『文明論之概略』より）

『万国政表』は周知のとおり福沢が最初に翻訳を始めました。残念ながら咸臨丸で渡米せねばならなかったということで、その後、これを「福沢子囲閲」ということで出したわけです。この「政表」という訳語は後に「統計」という別の訳語に代えられます。福沢が「政表」あるいは「スタチスチク」[2]と呼んだ学問について、福沢自身がその『文明論之概略』[3]の中でつぎのように論及しています。第四章の中で、「国の智徳とは国中一般に分賦せる智徳の全量を指して名を下だしたるものなればなり」（八一頁）と始め、さらに「人の心の変化を察するは人力の及ぶ所に非ず、到底その働は皆偶然に出て更に規則なきものと云て可ならんか」（八五頁）と自問自答しているわけですが、しかしそうではないのだと。すなわち「この変化を察するの一法あり」（八六

頁）と、それが「スタチスチク」であると高らかに宣言をしているわけです。「斯の如く広く実際に就て詮索するの法を、西洋の語にて「スタチスチク」と名く」（八九頁）。

周知のとおりこの「スタチスチク」は、今日では「統計学」との訳語が与えられている英語の statistics のことです。その statistics の語源については諸説があるわけですが、多くはラテン語とするものです。あるいは、十八世紀中葉のプロイセンを中心として行われた学問である Staatenkunde から statistics という学問が派生したようです。

この「スタチスチク」と福沢が呼んでいたもの、これの実体というのはどういうものであったのでしょうか。その問いへの回答の手がかりがきょうの表題にございます『万国政表』に一つ表されているのであろうと理解できます。

きょうのお話は二つの観点から申し上げようと思います。まず、『福沢事典』と『義塾史事典』の一読者として、何が私自身の勉強になったか、あるいは、知ることができたか。つぎに、本日の表題である『万国政表』後の統計学の展開に関し、私自身の問題として見出だした課題について、お話をしたいと思います。

福沢と「スタチスチク」『万国政表』

『福沢事典』の八六頁から始まる『万国政表』の項目には

翻訳は初め福沢諭吉が手掛けたが、訳業半ばで木村摂津守に随行して渡米することとなり、岡本節蔵（周

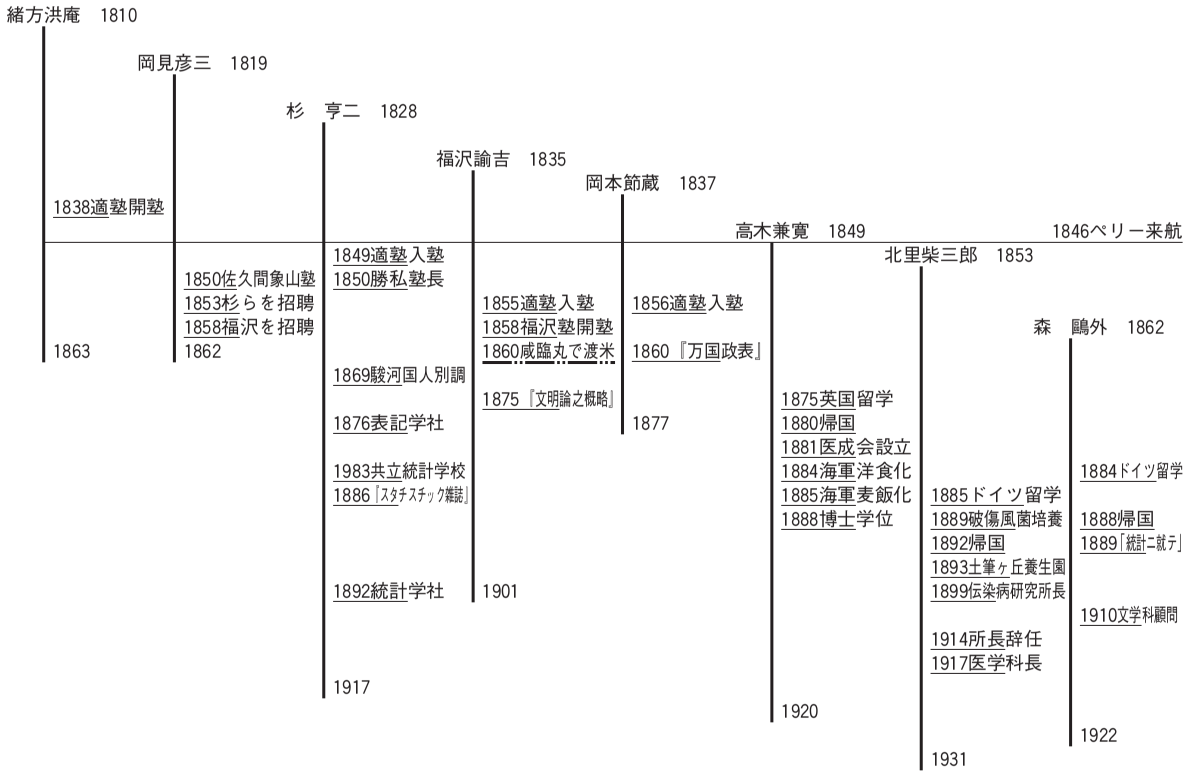
吉、のちの古川正雄）に完成を託し、福沢帰国後の万延元（一八六〇）年冬に福沢閲、岡本訳として出版された。

との記述があります。

この『万国政表』ですけれども、これは『福沢事典』の同じ項目の記述にもあるように、「日本における西洋の統計書のもっとも古い翻訳」と述べられ、その原著については「一八五四年刊行の原著の表題は、直訳すれば「国名、地積、政体、首長、その地を含む、地球上の全土に関する統計表」の意」と記されています。こういった学問は「国勢学」と呼べばよいのでしょうか。このように「スタチスチク」という名前で呼ばれていた学問には、「統計学」という定訳が与えられる前は、さまざまな呼び方で呼ばれていたようです。「国勢学」といったようなものもその中にあるわけですが、当時の「スタチスチク」という学問については、実体として今日の記述統計に近いとらえ方がされていたと考えてよいと思います。

『万国政表』とその後

図一をご覧ください。この図には「『万国政表』とその後」という題名をつけました。この図は『事典』の記述を手がかりとして、『万国政表』という訳書を世に送り出した福沢諭吉と岡本節蔵を中心に、その前後に関連のある人物の生きた時代を比較できるように作った図です。私自身がこの『義塾史事典』と『福沢事典』を読ませていただいて、何が私にとって研究上の助けになったかということをまず申し上げますと、それはこ


緒方洪庵　1810
1838適塾開塾
1863
岡見彦三　1819
1850佐久間象山塾
1853杉らを招聘
1858福沢を招聘
1862
杉　亨二　1828
1849適塾入塾
1850勝私塾長
1869駿河国人別調
1876表記学社
1983共立統計学校
1886『スタチスチック雑誌』
1892統計学社
1917
福沢諭吉　1835
1855適塾入塾
1858福沢塾開塾
1860咸臨丸で渡米
1875『文明論之概略』
1901
岡本節蔵　1837
1856適塾入塾
1860『万国政表』
1877
高木兼寛　1849
1875英国留学
1880帰国
1881医成会設立
1884海軍洋食化
1885海軍麦飯化
1888博士学位
1920
1846ペリー来航
北里柴三郎　1853
1885ドイツ留学
1889破傷風菌培養
1892帰国
1893土筆ヶ丘養生園
1899伝染病研究所長
1914所長辞任
1917医学科長
1931
森　鷗外　1862
1884ドイツ留学
1888帰国
1889「統計ニ就テ」
1910文学科顧問
1922

図一　『万国政表』とその後

れら『事典』における編集上の工夫のおかげで、この図を書くことが非常に短い時間で出来たことです。大体二日か三日ぐらいで出来たというのが正直なところです。本当はもっと『福沢事典』に目を通してはいるのですが、今日、どういう観点でお話をしようかということがなかなか固まりませんで、大体考えが固まったのが先週末ぐらいで、それではやってみようということで、書くことができた図です。

図一は、緒方洪庵、岡見彦三、それから杉亨二、福沢諭吉、岡本節蔵、高木兼寛、北里柴三郎、そして森鷗外、これらの人びとを横にとって、縦軸に上から下に向かって時間が流れる時系列で表しています。図一に描かれた縦棒が、生まれてから死亡するまでの間を示し、その間にこれらの人々の行動、あるいは相互の関係が、よくわかることを意図して描いた図です。

この図を作成する上で、私にとって大きな助けになりました『福沢事典』や『義塾史事典』の編集上の工夫が、二点ありました。その工夫とは、まず、どの項目にもその最後のところに、この『事典』の「ここを見よ」という参照すべき関連項目が示されている点です。『福沢事典』の八六頁から始まる『万国政表』の項目を例にとると、岡本節蔵、それから杉亨二と、関連項目が二つ示されています。これらを手がかりに、私は一読者として理解を深め、広げることが限られた時間で出来ました。つぎに編集上の工夫として「参考文献」が示されている点を挙げなくてはなりません。もちろん事典の一冊ですべての情報を得ようとすることは、それはあまりにも要求し過ぎですので、読者は関連のある文献によって自身が欲している情報を補うことが必要です。同じく『福沢事典』の『万国政表』の項目には『福沢手帖』の富田氏の文献と、それから西川氏の文献が示されています。『万国政表』といえばこの西川氏の『福沢手帖』の記事は決して外せないわけですが、こういった参考文献が適切に選ばれ示されていることが、非常に大きな助けになりました。

さらに研究上の効率性に間接的にかかわる点として、大変に興味深いと感じましたのは、先ほど井上先生もおっしゃっておられたのですが、項目の最後に署名があるということです。項目を読み終えた後、ああなるほど、この記事をこの方が書かれたのかと、非常に興味深く感じる時もありました。それは読者としてますます興味をかき立てられていく瞬間でした。書いた方の顔が見えないと、多くの事典がそうであるように、何となく無機質的に読み進めて終わるのでしょう。しかし、その記事を書いた方の顔が見えると、ああなるほど、これをこの方が書いているのか、などと編集者の意図に同感し、意外な方が書かれているとある種の驚きを覚え、あるいは知らない方が書かれていると、この方はどういう方なのかを知りたいと、そういう気持ちになります。そういったことが私にとっては非常に刺激になりました。署名があるということで過去の事象に関する記述と現在の研究者とが結び付けられ、そのことで『事典』を読み物として読む以上の楽しみを得たことが今回の私の経験であり、『事典』の読者として私自身が申し上げたいことです。

『福沢事典』『義塾史事典』における『万国政表』とその後

――人名索引を手掛かりに――

図一の「『万国政表』とその後」の展開として私は、杉亨二、高木兼寛、そして森鷗外にとくに注目しています。まず長い引用ですが、杉亨二は『福澤事典』の五一五頁に

官僚、統計学者、日本近代統計の祖。（中略）維新後は静岡藩に仕え、明治二（一八六九）年現沼津市原

の人口調査を試みる。（中略）九年には表記学社（のちスタチスチック社）を創設する。（中略）一二年、福沢が会長を務めた頃に東京学士会院の会員となっている。この年、杉は政表課職員を率い山梨県で、日本における国勢調査の先駆となる、個別世帯票による「甲斐国現在人別調」を実施した。（中略）一六年東京九段に共立統計学校を開校し、みずから教授長として統計専門家や学者の養成に力を注いだ。

との記述があるように、日本における統計調査の先駆けです。さらに高木兼寛、北里柴三郎、そして森鷗外はいずれも医学者です。とくに高木兼寛は海軍総監として脚気克服のために着手した海軍の兵食改革は、明治十七年（一八八四年）の洋食採用、明治十八年（一八八五年）の麦飯主食により成功を収めたことは周知の通りです。一方で高木は脚気の原因究明の方法をめぐって森林太郎と対立しました。さらに森は「統計」という訳語、および統計学の位置づけをめぐって、図一では取り上げていませんが、後に述べるスタチスチック社の今井武夫と論争をしています。図一は『万国政表』後の統計学をめぐるそうした経緯を踏まえて作成しています。

さて、それぞれの『事典』の中には、図一で取り上げた人物についてどの程度の記述の量、単に「量」にのみ注目すると言っては語弊があるかもしれませんが、そうした記述の量を表一に示しました。誤解を恐れずに申し上げますと、図一で取り上げた人物のうち、この二つの『事典』においては、緒方洪庵、岡見彦三、杉亨二、福沢諭吉、岡本節蔵の記述が充実しています。それから、当然ながら北里柴三郎もそうです。それに対して森鷗外については文学者としての記述は見当たりますが、医学者として「統計」あるいは「統計学」を論ずる森林太郎[4]についての記述は、残念ながら一つも見つけることができませんでした。勿論、「統計」あるいは「統計学」の観点から森林太郎を位置づけることは、私自身の興味によるものです。従いまして、まったくの

歴史の門外漢である私の立場から、このような資料をお見せするのは非常におこがましいことでお叱りを受けるかも知れないとは思うのですが、それを恐れずにあえてまとめたものが、表一です。

表一は、図一の人名が『事典』においてどの程度の回数だけ現れるかを、『事典』の人名索引を手掛かりにまとめたものです。

緒方洪庵の記述は、福沢が適塾で学んだことからその医学者としての側面も含め、とくに『福沢事典』に豊富です。さらに岡見彦三は『義塾史事典』の六三一頁にある「福沢諭吉を江戸に呼び蘭学塾を開かせた中津藩士」の記述を中心に豊富な記述があります。

図一に戻りますが、福沢が咸臨丸で渡米、さらに『万国政表』が世に出たのが一八六〇年です。それから少し経過して、『万国政表』から九年後の一八六九年、そこで杉亨二が『駿河国人別調』、いまで言う人口調査をわが国で初めて行ったということです。その杉亨二に関する記述は、「適塾の同窓生」や「呉文聡」などの項目中に見出され、やはり『福沢事典』に豊富です。その記述は「明六社」、「勝海舟」、「呉文聡」など広範囲に及んでいます。

表一では福沢諭吉についての記述は簡素にしています。『事典』における福沢諭吉自身の記述がどの程度豊富であるかということは、ここでの目的では必ずしもありませんのでこれ以上詳細な記述は必要ないでしょう。一方、岡本節蔵は福沢が咸臨丸で渡米した後、『万国政表』を引き継いだ人でありますけども、充分に豊富な記述があります。

続いて高木兼寛ですが、『福沢事典』の中に医学者としての記述を見出すことができます。高木といいますと海軍の兵食の改革でたいへん有名で、森林太郎と「脚気論争」を展開した人物であります。これは世間一般

表一　『事典』人名索引による『万国政表』とその後

人名索引項目	『義塾史事典』		『福沢事典』	
	項目数	主な項目名と頁数	項目数	主な項目名と頁数
緒方洪庵	4	医学部（p.216）、医学所（p.219）、岡田摂蔵（p.631）、福沢諭吉（p.735）	25	長崎から大阪へ（p.37）、大阪の蘭学（p.38）、適塾（pp.38-39）、洪庵と諭吉（p.48）、緒方洪庵（pp.461-462）など
岡見彦三	4	開塾（p.3）、前期鉄砲洲時代（p.4）、岡見彦三（p.631）、仙波均平（p.681）	5	兄三之助（p.19）、中津藩の蘭学（p.28）、中津藩と様式砲術（p.28）、江戸出府（p.56）、岡見彦三（p.462）
杉亨二	2	開塾（p.3）、岡見彦三（p.631）	9	適塾の同窓生（p.43）、明六社（p.122）、勝海舟（p.476）、呉文聡（p.494）、杉亨二（p.515）など
福沢諭吉	多数	開塾（p.3）、福沢諭吉（p.734）など	多数	数理と独立（p.99）など
岡本節蔵（周吉、古川正雄）	4	前期鉄砲洲時代（p.4）、塾長（p.4）、岡田摂蔵（p.631）、岡本周吉（古川正雄）（p.632）	7	江戸出府（p.56）、開塾（p.56）、万国政表（p.87）、大槻磐渓（p.460）、岡本節蔵（古川正雄）（p.464）など
高木兼寛	2	医学所（p.220）、松山棟庵（p.756）	2	博士会議（p.310）、松山棟庵（p.578）
北里柴三郎	18	福沢諭吉の長逝（p.65）、医学部（pp.216-217）、大学病院（p.218）、北里研究所（p.220）、大森憲太（p.629）、北里柴三郎（p.650）、福沢諭吉（p.735）など	15	伝染病研究所・土筆ケ岡養生園（pp.314-315）、養生園ミルク事件（pp.317-318）、洋食（pp.371-372）、北里柴三郎（p.485）、森村市太郎（市左衛門）（p.590）など
森鷗外	5	文学科（大学部）（p.173）、三田文学（p.176）、小山内薫（p.637）、久保田万太郎（p.657）、永井荷風（p.704）	0	

表一注一）項目数は『事典』中に当該の人名が表れる項目数を示し、人名索引が示す頁数の個数とは必ずしも一致しない。

表一注二）頁数は『事典』中に当該の人名が表れる頁数を示し、項目名の見出しの頁数とは必ずしも一致しない。

では高木兼寛の圧勝であるというふうに理解されているわけですが、それについてはまた機会を改めて論じたいと思います。医学者としての高木兼寛についての記述もそれなりになされていると言ってよいでしょう。

北里柴三郎ですが、一九一七年に医学科長ということもあり、非常に豊富な記述があります。表一に掲げた『事典』の北里に関する項目数は、他を圧倒していることが読み取れます。

それに対して森鷗外はどうでしょうか。表一の項目数はすべて「人名索引」で調べたものです。森鷗外については『義塾史事典』に表一の五項目を見つけることができました。　他方、『福沢事典』には森鷗外あるいは森林太郎の記述は人名索引の中では残念ながら見出すことができませんでした。表一の森鷗外の項目を見ますと、この五項目のいずれもが文学者としての鷗外に関する記述であることが分かります。

ここでお断り申し上げなければいけないのは、時間の制約もあり、表一は人名索引を手掛かりにして得た結果であることです。索引に出ていない項目は残念ながら調べる時間がありませんでしたので、そうしたものは取りこぼしている可能性があります。この留保を付けた上で表一の結果をご覧ください。

『福沢事典』『義塾史事典』における『万国政表』とその後

――事項索引を手掛かりに――

つぎに表二は図一に掲げられた人物がかかわる統計学関連の項目を、事項索引を手掛かりに『事典』から拾い出したものです。事項索引から探し出せた項目は、表二の左に示した『万国政表』、表記学社、共立統計学校、そして統計学の四つです。いずれも『福沢事典』に記述があったもので、『義塾史事典』にはどれも見出

表二　『事典』事項索引による『万国政表』とその後

事項索引項目	『福沢事典』	
	項目数	主な項目名と頁数
『万国政表』	5	命名（p.12）、万国政表（p.86-87）、署名（p.390）、大槻磐渓（p.460）、岡本節蔵（古川正雄）（p.464）
表記学社（スタチスチック社）	1	杉亨二（p.515）
共立統計学校	1	杉亨二（p.515）
統計学	4	適塾の同窓生（p.43）、万国政表（p.86-87）、呉文聡（p.493-494）、杉亨二（p.515）

表二注）『義塾史事典』は、表記の事項索引項目が『義塾史事典』中に見出せなかったので省略してある。

せなかったので表二では省略してあります。

表二からは、『万国政表』と統計学の項目、さらに全体としてみると杉亨二に関連する項目の記述が充実していることが分かります。

なお蛇足ですが、日本統計協会のホームページ[5]によれば、杉亨二について

明治9年（1876）2月　杉亨二は、統計学研究のため政表課員を始めとする有志10余名を集めて「表記学社」（明治11年「スタチスチック社」、同25年「統計学社」と改名）を創設しました。

また、明治11年12月小幡篤次郎ら15名と「製表社」を創設し、翌12年には渡辺洪基らと合流して「統計協会」（明治14年「東京統計協会」と改名）を設立しました。

との記述が見られます。こうした経緯からも、杉亨二の福沢諭吉とのかかわりが改めて確認でき、『福沢事典』における杉亨二の記述が充実しているのも自然なことです。

一方、表二においても、「統計」あるいは「統計学」についてスタチスチック社の今井武夫と論争した人物としての森林太郎の記述は見出されません。

『義塾史事典』『福沢事典』に見当たらない記述——森林太郎について——

一方、私の今日の主題である「統計学の『万国政表』後の展開」という視点から申し上げますと、文学者である森鷗外と呼ぶより医学者としての森林太郎が高木兼寛との間で繰り広げた先ほど申し上げた脚気論争が有名です。さらに森林太郎は、杉亨二が設立したスタチスチック社の幹事である今井武夫との間で「統計」という訳語をめぐり論争をし、この論争はさらには「統計学」の位置づけについての論争に発展しました。これら論争にかかわる森と今井の論文を表三に掲げます。

これら論争に先立ち「統計」という訳語をめぐっては、明治十九年（一八八六年）『スタチスチック雑誌』一号に、杉亨二が「「スタチスチック」ノ話」を掲載し、杉は「統計」という訳語に反対意見を述べています。(6) なお今井武夫は、杉亨二が設立した共立統計学校を卒業後、明治二十年から二五年までスタチスチック社幹事を務めた人物です。

この森林太郎と今井武夫との論争は主に二つの観点からでした。一つは「スタチスチック」に「統計」の訳語を与えるのは適切なのかという観点です。(7) 森林太郎は「統計」というのは何ら悪い言葉ではないと主張しました。それに対し、杉亨二およびその高弟である今井武夫は、それは適切ではなく、「スタチスチック」本来の学問領域を誤って理解させてしまう、そういう悪い言葉であるという主張し対立した、それが一点。

それからもう一点は、これは学術的な面でより大事だろうと私は思うのですが、統計学というのは因果を明らかにするサイエンスなのか、あるいは、相関を示す理法であるのかという、この点についてもやはり今井武

表三　「統計」「統計学」をめぐる森林太郎と今井武夫の論文

森林太郎 ・「医学統計ノ題言」『東京医事新誌』569号、一八八九（明治二二）年二月二三日 ・「統計ニ就テ」『東京医事新誌』573、一八八九年三月二三日 ・「統計ニ就テノ分疏」『東京医事新誌』573、一八八九年六月八日 ・「統計三家論を讀む」『東京医事新誌』593、一八八九年八月十日 ・「答今井武夫君」『東京医事新誌』593、一八八九年九月十日 ・「讀第三駁義。寄今井武夫君。用鷗外漁史韻」『東京医事新誌』603、一八八九年十月十九日 ・「「三タビ統計ニ就テ」ヲ讀ム」『東京医事新誌』604、一八八九年十月二六日 ・「統計ノ訳語ハ其定義ニ負カズ」『東京医事新誌』605、一八八九年十一月二日
今井武夫 ・「統計に就て」『スタチスチック雑誌』37号、一八八九（明治二二）年 ・「再び統計に就て」『スタチスチック雑誌』39、一八八九年

表三注一）上記の森林太郎の論文は森林太郎『鷗外全集』第28巻、岩波書店、一九七四年による。

表三注二）上記の今井武夫の論文は日本統計協会創立百周年記念事業計画委員会『明治・大正期スタチスチック雑誌統計学雑誌論文選集』日本統計協会、一九七九年による。

夫と森林太郎の間で激しい論争が繰り広げられております。

森林太郎のこういった論争に関する主張は、もっぱら『東京医事新誌』によるものでした。それに対して今井武夫の主張は『スタチスチック雑誌』に述べられているわけです。表三に掲げた森林太郎の著述「統計ニ就テノ分疏」の「第二、法と学」では「夫レ統計ハ理法ノ一区域ナリ」「統計ハ物的帰納ノ一理法ナリ」と述べ、「第六、因果の弁」では「今井君ハ統計ヲ以テ因果ヲ悟ルノ方便ナリト思ヒ玉フニ」と切り出し「（イ）統計ハ以テ原因ヲ探求スベキ方法ニ非ズ」「（ロ）統計ノ方法ニテ探求シタル法則ハ決シテ因果ト関係スルモノニ非ズ」と今井の論を切り捨てています。(8)

こういった統計学の展開における論争では、今日においてもその学術的意義が認められる、非常に深い議論が行われていたわけです。統計学というものは、因果を明らかにできるのか、あるいは、単なる相関を示すに過ぎないのかという議論は、今日でもたぶん生きている、まだ決着がついていない議論だと考えております。そういった議論がこ

の時代にすでに行われているわけです。

慶應義塾における研究上の伝統として、実証的方法論、その一つとして三田における統計学の展開、これはよく言われるわけです。これは私の専門の計量経済学だけでなく、たとえば、三田の歴史の研究方法の中においても、実証的な研究方法が定着していると私は理解しております。

こういった研究上の伝統というものがあるわけですが、それを鑑みたときに、『万国政表』後の統計学上の展開についての記述を見出だすことができなかったというのは、ちょっと寂しい思いがいたしました。

『万国政表』後の日本における統計学

統計学の展開が、慶應義塾においてどうであったかということも一つ重要な問題ですが、広く見渡してみますと、日本における統計学の展開というのは、様々な方向を持っていたようです。東京帝国大学においては、主にマルクス経済学と結びついて、たとえば、有沢広巳のような展開を示しているわけです。表三に掲げました論文以外にも、『スタチスチック雑誌』には統計学の方法論にかかわる主な論文として(9)

・杉亨二「社会の事実は方法によらざれば知るべからず」『スタチスチック雑誌』四三号、一八八九（明治二二）年

・呉文聡「統計の話」『スタチスチック雑誌』七九・八〇号、一八九二（明治二五）年

・高野岩三郎「故杉亨二氏ト本邦ノ統計学」『スタチスチック雑誌』三八三号、一九一八（大正七）年

などがあります。さらに経済統計に関する論文として、

・ハウスホーフェル述、呉文聡訳「経済生活のスタチスチック」『スタチスチック雑誌』第三一・四二・四六・四七号、一九八八（明治二一）年
・高野岩三郎「経済指数法に就て」『スタチスチック雑誌』第三二六・三二七号、一九一三（大正二）年
・福田徳三「失業問題の数的考察」『スタチスチック雑誌』第四五三・四五四号、一九二四（大正十三）年

と、三田にも所縁のある福田徳三の論文もあるわけです。

こうした歴史を振り返ってみますと、それぞれのスクールにおける統計学の展開の中で、三田、あるいは慶應義塾のスクールの位置づけが、おそらく他のスクールとの関係性のなかで、ひょっとしたら浮き出されるのかもしれない。そういう研究も一つ必要なのかもしれない。そのように考えるに至ったわけです。これは『義塾史事典』や『福沢事典』への要望というよりは、私自身の研究テーマとしてそういうものが必要だろうと考えております。

福沢諭吉と森鷗外の写真から

『鷗外全集』第三十巻、岩波書店（昭和四九年）には、鷗外と福沢が一緒に並んで写っている写真があります。これは明治三十年頃ということらしいですが。こうした具合に鷗外は三田にも通っておりましたので、鷗外の文学者としてだけでなく、医学者として統計学を考える研究者、そういった側面についても、やはり研究していく必要があるのだろうと思いました。

そういったことを考えるうちに、一般的に慶應義塾とはいったい何者であろうかと、我々は何者であろうか

と、そして我々は歴史のどの位置にあるんだろうかということを考えさせられます。先ほどの先生方とのお話しの中でも私は思ったことなのですが、ほかのスクールとの関係性において、慶應義塾についてもう一回考えてみるという作業も必要なのかなという気がいたしました。

だいぶ時間が過ぎましたので、ここまでにいたしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

注

（1）本稿では、『義塾史事典』『福沢事典』の両方を示す場合は『事典』と記述した。

（2）「スタチスチク」は statistics に福沢が与えた言葉であるので、西川俊作「スタチスチク〔ス〕」『三田評論』一〇四四号（二〇〇二年）が述べるように最後に「ス」を付けるべきであるが、『文明論之概略』における記述を本稿ではそのまま用いる。

（3）引用文の最後の括弧内に示した頁数はすべて戸沢行夫編『福沢諭吉著作集 第四巻 文明論之概略』（二〇〇二年）初版による。

（4）『事典』には主に文学者である「森鷗外」として記されているが、本稿では医学者として取り上げる場合には「森林太郎」と記す。

（5）http://www.jstat.or.jp/information/sugi/index.html（二〇一一年三月九日参照）

（6）日本統計協会創立百周年記念事業計画委員会『明治・大正期スタチスチック雑誌統計学雑誌論文選集』日本統計協会、一九七九年による。

（7）二〇一一年三月十日の福沢センターコンファレンスにて筆者が配布した資料に、「明治七年（一八七四年）箕作麟祥（一八四六―一八九七）の翻訳書『統計学　国勢略論』（原著：Moreen de Jonne（1856）Elements de Statistique, 2.

ed）が最初か？」との記述を行った。この記述に対し、福沢研究センター准教授の都倉武之氏より、『福沢事典』七四七頁に「福沢自身は「スタチスチ（ッ）ク」と表記していることが多く、これに「統計」の語を宛てたのは柳川春三であるといわれる」という記述があるとのご教示を受けた。ここに記して感謝の意を表する。

（8）森林太郎『鷗外全集』第二八巻、岩波書店、一九七四年による。

（9）以下の論文はすべて本稿注（6）の文献による。